

春の訪れを告げる梅の開花情報が各地から聞こえてきます。とは言え、まだまだ寒い日も続きます。風邪などひかないよう健康にお過ごしください。
現在会員登録数 1,892 人さま。次号は 3 月 19 日発行の予定です／

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》読書活動ボランティアのためのワンポイント 66

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

【1】お知らせ

● 「日産 童話と絵本のグランプリ」受賞作品原画展

当財団主催「第 31 回 日産 童話と絵本のグランプリ」（平成 26 年度実施）の入賞作品の原画展を開催しています。3 月中旬に予定しています第 32 回（平成 27 年度実施）グランプリの発表後は、新しい入賞作品の原画に展示替えします。

日 時：開催中～3 月 27 日（日）＊ただし、国際児童文学館の開館日時

場 所：大阪府立中央図書館 国際児童文学館（東大阪市荒本）

入場料：無料

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Isoko's Talk

『ハーレムの闘う本屋 ルイス・ミシヨ一の生涯』ヴォーンダ・ミシヨ一・ネルソン/著 R・グレゴリー・クリスティ/イラスト 原田勝/訳 あすなろ書房
2015年2月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：黒人居住区のハーレムで、5冊の本から始め、道で本を売り歩き、黒人について書かれた本、黒人が著者の本だけを扱い、マルコムXをはじめ、多くの黒人の知識と情報の拠点になった専門書店ナショナル・メモリアル・アフリカン・ブックストアの店主ミショーの個性的な人柄とその生涯を描くドキュメンタリーノベル。

I：読んで元気が出る本。本を読むことは「自分の足で立ち、自分の頭で考えること」というメッセージがルイスの言葉や生き方からストレートに伝わってきました。全然お説教ばくない！黒人が本から遠ざけられてきた歴史もよくわかりました。

Y：子どもの頃から盗みを繰り返し、大人になってからは賭場を経営するなど、学問とも本とも縁遠い生活を送っていたルイスが44歳で突然ハーレムで本屋を始め、5冊から始めた本屋が22万5千冊にもなるというルイスの人生が興味深かったです。

I：ルイスは9歳で自転車を盗んだ時も、その後も、ずっと黒人について、キリスト教について考え続け、ルイスの兄がキリスト教の伝道師になった時には、その手伝いをしながらも、自分の頭で何が正しく、いかに生きるべきかを考えている。つまり、差別や宗教を客観的に見る目を持ち続けています。そういう意味では、書店の種はずっとルイスの中に眠っていたのです。

Y：原題は“ No Crystal Stair”で、アメリカの黒人詩人ラングストン・ヒューズの「息子よ、お聞き。わたしの人生は水晶の階段じゃなかった。」がある詩からとっています。この詩は、ルイスが高校を中退した10代のスヌーズ（いねむりの意）という少年に詩集『夢の番人』を紹介しているという設定で出てきます。

I：スヌーズは、著者が作った架空の人物ですが、彼が出てきたことで、この本が10代にも読める作品になっています。最近は、このように、歴史的な事実の中に架空の人物を登場させて、歴史を読者に実感させるドキュメンタリーノベルが増えていると感じます。ルイスの弟の孫である著者が15年かけて調べた事実やインタビューを元に作品をフィクション化したところに真実味とドラマ性が出ています。

Y：ルイスは、最後には市の政策によって書店を閉めなければならなくなります。いつの時代も権力側は言論の自由を封じ込めようとするということもこの本を読んで思いました。

I：写真やFBIの記録文書等も多数掲載され、直線的な力強い描線の挿絵も引きつけます。

* 今回のゲストは当財団特別専門員の川内五十子さん（I）です。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第6回「かしわばやしの夜」

ほうり出された赤いしゃっぼ

日暮れどき、画かきと清作は、「鬱金しゃっぼのカンカラカンのカアン。」
「赤いしゃっぼのカンカラカンのカアン。」と、のどいっばいどなりあい、
「いや今晚は、野はらには小さく切った影法師がばら播きですね」「えっ、

今晚は。よいお晩でございます。えっ。お空はこれから銀のきな粉でまぶされます。ごめんなさい。」と挨拶しあいます。そして、ふたりは、画かきが柏の木大王に招待されたという「夏のおどりの第三夜」に出かけます。

ところが、柏の木たちは、画かきにはいい顔をするのに、清作にはいやな顔をします。百姓できこりの清作が柏の木を98本も切ったのをうらんでいるのです。清作は、木を切るかわりに、山主の藤助に酒を2升買ったのですが、柏の木大王は、買う相手をまちがっている、清作は「前科九十八犯じゃぞ。」と怒ります。

清作と柏の木たちのわだかまりを残したまま、あるいは、わだかまりを別のものに転化するように、歌合戦がはじまります。画かきの一等賞から九等賞まで賞品を出すという呼びかけにこたえて、柏の木がとび出してきては歌います。しかし、歌には、ほとんど意味がありません。たとえば、「馬と兎」（うさぎのみみはながいけど／うまのみみよりながくない。）たとえば、「猫のうた」（やまねこ、にゃあご、ごろごろ／さとねこ、たっこ、ごろごろ。）

歌合戦は、どんどん盛り上がっていくけれど、歌に意味がない分、ことばが「声」としてひびいていきます。作中に「声」の身体性が満ちていく「かしわばやしの夜」には、「よだかの星」（本メルマガNO.64 第4回参照）にも似た「過剰さ」の積みあげを見ることができます。「よだかの星」では、その積みあげの果てに「浄化」がおとずれますが、「かしわばやしの夜」では、青白く冷たい霧がおちてきて、「夏のおどりの第三夜」は、あっけなく幕をおろすのです。それでも、その場にほうり出された画かきの赤いしゃっぽ（帽子）が、「過剰さ」を積みあげる世界が確かにそこにあったことを証し立てています。（馬車別当）

（本文の引用は、角川文庫版『注文の多い料理店』によりました。）

《3》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 66

その9 おはなしを語る（4）語るポイント5

ユニークな登場人物はおはなしの魅力です。登場人物のせりふをどう表現するかによって、おはなしが楽しくなったり、つまらなくなったりします。

例えば、以前ご紹介した「二ひきのよくばり子グマ」（『子どもに聞かせる世界の民話』矢崎源九郎編 実業之日本社 1964年）というお話の中には、2ひきの兄弟の子グマが登場します。母親の元を発って2ひきで歩いているうちに食べ物を全部食べてしまい、それでも歩き続けているところで、「ああ、にいさん、ぼく、もう、歩けないよう。朝から なんにも、たべていないんだもの。」という弟グマのせりふがあります。

「ああ」は、つかれによるため息なのか、空腹によるため息なのか、兄に不満をぶちまけるためのため息なのか、歩けないという絶望のため息なのか、食べ物がなくなった不安なのか、二人きりで旅をする心細さなのか、本当に死にそうなのか、それともまだ、力はあるのか。弟グマの年齢と兄との年齢

の差によっても言い方が異なってきます。

確かなのは、「泣く」ほどつらく感じていることと、それでも「のろのろと」歩き続けることができ、チーズを見ると「いそいで」そばへ行くことができる力は残っているということです。ですので、このせりふを、本当におなかですいて死にそうに表現してしまうと、後の展開と矛盾をきたします。一方で、泣きながら言うと、「なきだしました」という次の言葉と合いません。と言っても、単に兄を責めるためだけに言っているというように表現すれば、チーズが出現した時に兄弟げんかばかりが強調され、2ひきがチーズに夢中になっている気持ちが理解できません。

弟グマが「もう、歩けない」と言うのは、弟グマにとっては正直な気持ちではあるけれども、客観的に見れば、まだ歩けるという状況であり、ここで最も訴えたいのは、「朝から なんにも たべていない」のでお腹がすいたということだと押さえられれば、このせりふのおはなしの中での役割を理解して語るすることができます。

このように、登場人物のせりふを語るときには、人物像をイメージするのみでなく、前後の文脈からせりふが意図する内容と作品内での役割を考えることによって、せりふが生き、魅力的な登場人物を造型することができます。

* 次号は「その9 おはなしを語る（4）語るポイント6」の予定です。
質問や意見をいただきましたら、お答えしていきたいと思います。（Y）

《4》 行って来ました！

兵庫県立美術館で3月6日まで開催されている「奇想の版画家 谷中安規展 蔵出し！M氏コレクション」に行ってきました。

谷中安規（1897～1946）は、昭和初期から戦中にかけて活躍した木版画家で、終戦翌年に49歳の若さで亡くなっています。今回の展示では、主に1930年代の作品が約170点展示されています。

版画のサイズは小さくて、額縁に入れられてずらりと並んでいます。木の彫りあとに温かみを感じます。幻想的で不思議な絵柄が多く、蝶を口から吐き出している人の絵や、動物に乗った子どもの絵など、一つ一つに物語が想像できておもしろく感じました。

「版芸術」という雑誌に掲載された「影絵芝居」という作品は全13景すべてが展示されていました。死神に連れて行かれた子どもを必死に取り戻しに行く母親の物語ですが、死界では子どもは鬼と楽しそうに過ごしていたり、その間に現世の父親が亡くなっていたりするシュールな内容です。

内田百間や佐藤春夫などの作家と交流があり、装幀や挿絵の仕事も依頼されたそうで、内田百間のお伽噺集『王様の背中』（楽浪書院 1934）の挿絵の版画もありました。他にも、ケースに入っていて本の表紙しか見ることができませんでしたが、『支那怪談全集』（田中貢太郎 博文館 1931）や『冥途』（内

21時40分大阪難波発奈良行き特急、隣合わせた方が文庫本を読んでいた。それだけですがごく好感を持った。近頃は、満員の通勤電車でもゲームに夢中の人が多く、迂闊に立っているとスマホ軍団に包囲されていることがある。新聞を広げて読む人にも困ったけれど、いつからか車内は“読書空間”ではなくなった…。そんなことを考えながら、私はというと、右手に缶ビールなのでした…。(A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
